

書、時代、文学

三つのキーワードから石川九楊の世界にご案内します。



書

著作コーナー……広い分野におよぶ100冊以上の全著作を一堂に展示

書は文学か？



「文字ではなく言葉を書く、書と文学は地続き」と石川九楊は語ります。「書は何を表現するか」の解明をへて書字論を確立。書、文字、漢字、ひらがな、東アジア、日本語、日本文化へと広がる評論を発表。書と歴史と文化、手で書くことの意味を解き明かす評論の仕事の全貌に迫ります。

『中国書史』『日本書史』『近代書史』

古代中国から現代日本までの歴史を作品に即して解説。漢字を使う東アジアの国々の歴史と文化に、書がどのような影響を与えているかを説いた書史三部作。30年の歳月をかけ論考を重ねたライフワークで、東アジアの書の歴史の全貌が展望できる大著です。



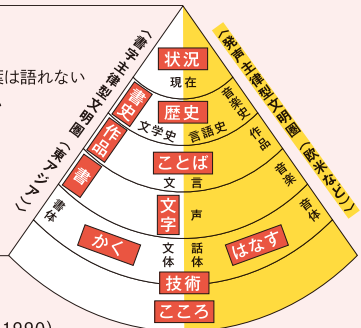
『筆蝕の構造』

手に持つ筆やペンが、紙に触れ文字(痕跡)を残して離れるまでのさまざまな出来事を「筆蝕」と命名。「書くとは筆蝕すること」という原理を明らかにした記念碑的著作。石川九楊の代表作。



【石川九楊の論及分野】

状況論=書くことと時代
 文字論=文字ではなく、言葉を書く
 言語論=文字ぬきで東アジアの言葉は語れない
 国家論=文字のちがいが国のちがいを
 東アジア論=漢字がつくった東アジア
 書論=書は言葉のスタイル
 作品論=筆蝕(書きぶり)の美学
 書史論=書くことと文化の歴史
 技術論=どのように書くか



【受賞歴】

- サントリー学芸賞 (1990) 『書の終焉』(同朋舎出版)
- 京都府文化賞功労賞 (2000) 文化芸術活動を通じ文化の向上に功労
- 毎日出版文化賞 (2002) 『日本書史』(名古屋大学出版会)
- 日本文化デザイン賞 (2002) 文字にまつわる多数の著述による思想展開と、先鋭にして驚異の書の実践
- 京都新聞大賞文化学術賞 (2003) 3年間1095日におわたる『一日一書』の連載など文化的、学術的活動
- 大佛次郎賞 (2009) 『近代書史』(名古屋大学出版会)

式

作品コーナー……若き日の未公開作品と習作、そして近年の話題作を公開

時代を表現する？



半世紀以上におよぶ石川九楊の創作の歴史、何という句をどのように書くか？今の時代を映した言葉とそれにふさわしい表現とは？この問いへの答えを求めて日々新たな作品を生み出し続けています。

『灰色の時代』の作品 (1966～70)

谷川雁・吉本隆明・田村隆一など詩誌『荒地』の詩人たちの現代詩を題材に、「時代に釣りあう表現」を追い求めていた時代の作品。薄くグレーに染めた紙を使い、その濃淡のなかに時代の言葉を載せようと試みた「灰色の時代」の作品群です(会期中展示替)。



連作「はぐれ鳥とべ」のための未公開習作 (1978) 一挙公開

目隠しをする、左手で書く、包帯を掌に巻きつけて不自由な状態で書く……。書けばできてしまう作品から脱却して、新たな表現を求めて格闘した数々の作品です。この試みをへて、「はぐれ鳥とべ」で再び白い紙に復帰しました。



自作詩文作品 (2001～現在)

9・11事件に題材をとった作から現在にいたる話題作十数作を公開(会期中展示替)。「灰色の時代」をへて「歎異抄」「源氏物語」など日本古典に退却した作品を通して、再び時代を表現する書へと向かいます。「書くことなど何もない。それゆえ書くのだ」と自作の詩文に取り組みました。

参

九楊を知る……筆蝕、二重言語国家・日本、東アジア漢字文明圏、そして肉文字

書＝文学とは？



最新著作

『石川九楊自伝図録 わが書語る』みづからの書の制作の歴史を語った初の自伝的図録。小学校入学以前の書との出会いから、試行錯誤を重ねた若き日、古典作品への回帰、そして再び時代を表現する現在……。作品図版を多用しながら、制作の歴史と人生を語っています。12回の講演が一冊の本として刊行されるまでの全過程を公開します。

現在の閉塞した文化状況は日本語がポロポロになったことに起因する……。文学作品や現代の社会問題を分析しつつ、書が担う役割を明らかにしていきました。書は筆蝕の劇(ドラマ)であり、書は言葉の芸術である。そして「肉筆、縦書き」の復権にこそ日本再生のヒントがあると提言します。



最新著作『河東碧梧桐』の全参考資料・全原稿を一挙公開

正岡子規門下の一の高弟でありながら、高浜虚子と俳壇によって「消しゴムで消された俳人」河東碧梧桐の、書と句作と思索に迫る初の評伝。碧梧桐の書に驚嘆して以来、30年以上にわたり集めた関連資料を縦横に駆使して書き上げました(初出は『文学界』)。副題に「表現の永続革命」とあるようにみづからの書の制作史と重ねた匠巻の評伝です。

講義・講演手書きレジュメ初公開

原稿はもちろん講義・講演などのレジュメもすべて手書き。印刷文字かと思わせるレジュメの文字は、原稿の文字とはまったく書きぶりが異なり驚くばかりです。「日本語をヨコに書くのはアルファベットをタテに書くのと同じ」と語り、「肉文字」の復権を提唱する謎も解けます。文芸誌『文学界』誌上で発表したワープロ作文批判は、2000年代初頭、文壇の一大論争の口火となりました。

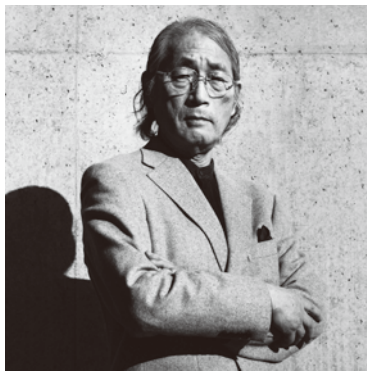


書名揮毫書籍

装幀デザイン分野でも活躍し、さまざまな書籍の題字揮毫・装幀・造本を手がけています。また、書字論の確立と実作の真贋鑑定の蓄積から、筆跡鑑定分野でも大きな実績を残しています。

文房四宝の初公開

愛用の毛筆、硯、墨、紙、筆記具、自作原稿用紙などを特別公開します。とりわけ120×60cmの超巨大硯、百本にのぼる筆は見ものです。



石川九楊 いしかわ きゅうよう

書家・評論家。京都精華大学教授・同文学文明研究所所長をへて現在、同大学客員教授。昭和20(1945)年、福井県今立町に生まれ武生市(現・越前市)で育つ。武生市立東小学校、第三中学校、県立藤島高校をへて京都大学法学部入学。進学にあたり、書の師・垣内楊石より九頭竜川にちなみ「九楊」の名を与えられる。同42(1967)年、京都大学卒業後、三洋化成株式会社(京都市)入社。同53(1978)年、11年間の会社員生活に終止符を打ち書家として独立。以来、作品制作と執筆活動に専念、いづれの方野でも最前線の表現と論考を続け、現在までに書作品千点・著書百点以上を世に送り出した。

【期間中の関連イベント】

10月24日(土) 14:00～15:30

講演会：「書という文学への旅」

定員(50名)・参加無料・要申込
 会場：福井県立図書館 多目的ホール

12月9日(水)

福井県ふるさと文学館 文学講座

- ①キャラリートーク(学芸員)一要申込(10名) 13:00～13:30
- ②文学講座：「郷土作家の書を読む、文字を読む」 14:00～16:00

定員(50名)・参加無料・要申込
 会場：福井県立図書館 多目的ホール

【石川九楊サイン本販売】

館内カフェ「あすわの木」コーナー

【石川九楊揮毫

ほぼ日特製“おちつけグッズ”販売】

館内カフェ「あすわの木」コーナー

【白川文字学の室】(福井県立図書館内)

石川九楊の書論にも影響を与えた故白川静博士の自宅研究書庫をそっくり再現。著書や映像、関連資料にふれることができます。

※今後の新型コロナウイルスの感染状況によっては、イベントを中止・延期する場合があります。その際は、公式HPなどでお知らせします。

